

**裁判はいよいよ
2月10日結審**
長かった裁判も
ついに終わりへ。
午後1時10分から
京都地裁にて、
最終準備書面を
交換します。

**裏面は
新組合員の
エッセイ!**



京都大学時間雇用職員組合
ユニオンエクスタシー
606-8317 左京区吉田本町
京都大学時計台前
070-5579-4437
ブログ <http://extasy07.exblog.jp>
メール unionextasy@gmail.com

組合員募集しています
組合費は月400円です

来年度の契約更新が不安な方、ご相談ください!

いよいよ契約更新の季節です。来年度の契約が無事に更新されるかどうか、不安な方も多いのではないのでしょうか。

上司から契約打ち切りと言われたら、なかなか「NO!」とは言い返せないもの。「少し考えさせてください」などと持ち帰り、その場で同意しないことが大切です。後日、「働き続けたい」という意志をはっきり伝えましょう。

でも、自分一人では闘い方もわからないし、うまくいかないかもしれない。かといって「泣き寝入り」するのは悔しい。そんな時は、労働組合の出番です。交渉によってねばり強く雇用継続を勝ち取りましょう。

決してあきらめず、ご相談ください。

カフェ、 移転しました!

工事の関係で、カフェが移転しました。こんどは時計台に向かって左側へ。

池の奥にあって、落ち着いた雰囲気です。



2/19なんで 有期雇用なん!? リターンズ@京都 (龍谷大学にて)

雇い止めとたたかう各大学の仲間たちと、今年も集会を開きます。

「公募に応募できる のは当然」と岸本氏

5年条項についての大学の通達には、「部局が特に必要と判断した場合、当該業務に従事する非常勤職員の募集を公募により行うこととし、5年満了時において当該業務に従事する職員も、この公募に応募できるものとする」と書かれています。ところが、この公募が行われるにも関わらず、応募を妨げるような運用をしている部局があるのです。

たとえば工学研究科や医学研究科、それに他のいくつかの部局では、あらかじめ「応募するな」「応募しても採用しない」などと本人に通告することにより、再雇用の道を断ち切った例があります。

12月20日の本部との団交の席上で岸本総務部長は、こうした例は聞いていないとしながらも、それがもし事実だとすれば、そのような恣意的な取り扱いは認めていない。こちらの意図とも違う、と断言しました。

現場の判断に任されているのは、「その業務について(例外的に)公募を行うかどうか」であって、「本人に公募を受けさせるかどうか」で

5年条項の撤廃を求め、 団交申し入れ中!

要求項目

- ① 5年条項を撤廃してください。
- ② 仮に今すぐ撤廃できない場合でも、5年条項は「5年で業務の見直しを行う」という趣旨にとどめ、「例外的」に業務が5年以上継続する場合には、通常の更新手続きによって再雇用を可能とする方式へ暫定的に改めてください。
- ③ クーリング期間を1年から3ヵ月へ短縮してください。
- ④ 2010年4月1日から現在までに、5年満期に達した非常勤職員の人数、および、そのうち再雇用された人数を明らかにしてください。

「それは誤った解釈であり、いったん公募を行うと決めた以上、当該職員に応募資格があることは当然である、と岸本氏は明言しました。要は、通達に対して現場が過剰反応し、本部(岸本総務部長)の意図とは異なった運用がなされていたというわけです。(組合として、こうした恣意的取り扱いをなくすよう、本部から部局へ徹底するように申し入れました。)

この春に5年満期を迎えるみなさん。堂々と公募に応募してください。もし応募を妨げるような部局があれば、すぐにお知らせください。

これでは、誰も安心して相談をすることができません。ハラスメントのない職場を作ることは雇用主の法的義務です。今すぐ調査を開始してください!

**文学部は人権委員
会の調査を開始し
てください!**

T掛長のパワハラについて文学部人権委員会に申し立てをしてから、もう5ヶ月以上も放置されたまま。これは人権委員会の信頼にかかわる大問題です。

これでは、誰も安心して相談をすることができません。ハラスメントのない職場を作ることは雇用主の法的義務です。今すぐ調査を開始してください!

組合員のTamaraです。時間雇用職員として京大に勤める毎日を送っています。

終業後おいしいコーヒーが飲みたくなったとき、今でこそくびくびカフエに「こんにちは」と行けるようになりましただが、それまでは恐る恐る遠くから様子をおかがう・・・という時期が過ぎました。

そんな臆病な自分が組合員になり、その上、まさか団交に参加するなんて。

去年の9月9日、5年条項撤廃の団交に、現職の組合員として出席したのです。非常勤職員の生の声を伝える、というのが私の役目でした。「団交」が「団体交渉」の略ということも、つい最近まで知らなかったのに！

自分が参加しても戦力になれないのでは？参加を断ろうかとずいぶん悩みました。また現職は匿名参加可能とはいえ、もし何かで身元が知られたら、職場や自分にどんな影響が及ぶのか心配です。

でも、ここは一歩踏み出してみるか・・・少しの勇気が生まれ、参加することにしました。

いよいよ当日。ユニオン総勢7名、まずはくびくびカフエに集合です。浪曲を聴いて気合を入れてきたというIさんは、ネクタイを締めてハレの装い。一方Oさんはいつものリラクセスしたファッションで、皆に「それパジャマ？」と突っ込まれていましたが、

発声練習をしたりして準備を整えます。

私はといえば、緊張し、「平穩に(?)終わりますように、うまくしゃべれますように」と心の中で祈る気持ちでした。

この時の団交の主要テーマは、5年条項撤廃です。京大のお給料で生計を立てている者として、「非常勤は全員5年で首切り」が、とにかく一番の不安のタネです。

いえ、5年もつのかどうかさえ、わからない。職場で「予算が減っている」という話を聞かされたとき、重い気持ちになります。心底不安なときは、不安を口にするこすらコワかつたりします。不安にフタをする

はじめて団交に参加しました

と、そこにブラックホールが生まれます。そんなときはいつも、離婚直後、生活にいき詰まったときの体験が蘇ってくるのです。

さて、団交で私が話したのは、身をもって経験した就職活動の厳しさ(正規職の応募倍率の高さ)、そんな中で京大時

間雇用の職を得、現在なんとか生活できていること、そしてこれからも京大で安心して働き続けたい、という内容でした。

塩田理事は私の発言を、目をみながらしっかりと聞いて下さり、まず「いろいろとご苦労様でした」と語りかけて下さいました。その真摯な言葉は、こちらの胸にすっと伝わり、

嬉しい、と素直に感じました。続いて次のようなコメントがありました。

「今のような労働条件ですと働かれると、あなたにとっても良くない」「正職員の採用試験やほかの可能性にぜひトライして、次の道を頑張っ

てほしい」・・・

この言葉を聞いたとき、私は思考がストップするような感覚に陥りました。「正論」かもしれない。そして理事の「善意」も感じます。でも、何か胸につかえる感じがして、返答の言葉が出ませんでした。

もし、私の母がこの理事のご意見を聞いたなら、大賛成し

ていることでしょう。「理事のおっしゃる通りよ。組合も大事かもしれないけど、それより、早く次の道を探しなさい。年ばかりとつてますます就職が不利になるわよ」と。

これは、おそらく「世間代表」の意見でもあると、今までの経験から確信します。

ただし、なのです。理事は大学経営の当事者です。団交は働く者と経営者との交渉の場。そういう場で、「うちの職場の労働条件はあなたにとってよくない」「他の道を頑張れ」と論ざれてしまうって、

どういうことなんだろう？私の頭がストップしたのは、「あなたのため」という名の

もと、話が「自己責任」にすり替わったからだ、今にして思うのです。言われた私は虚を突かれ、「ああ、やはり自分の問題だ、自分が頑張らねば」と思ってしまった。すべてを自分が背負う方向へと、思考が傾いてしまう・・・。

このロジックは、いろんな場面で使われている気がします。あなたのため、としながら、言う側の都合が巧妙に隠されていたりします。たとえば「レイボーイが君のために別れよう」と言うような？

個人としては誠意でおっしゃった言葉でも、このロジックのもとで、理事は経営者として責任転嫁をしていることに

なるのでは？そして、そのことに気づいておられないのでは？と考えてしまうのです。

「自己責任」の落とし穴に落ちると、人はどんどん孤独になる・・・自分の経験からそう思います。社会的な構造の問題があるのに、それが見えないと、生き辛さをすべて自分のせいにし、苦しい、と

声を上げることもできなくなっていく。孤独の果てに待つているものは、なんでしょうか？

予想のつかない人生のハプニングがあり、泣いたり笑ったりして、これまでやってきた私自身これからどう生きていくか、考えながら歩ん

でいきたいと思えます。一方で京大は、社会的責任のある研究・教育機関として、また府内でも有数の事業所として、正規も非正規も安定して働ける体制を作っていく努力が求められるのではないのでしょうか。

ですが団交の場では、ここがどうしてもかみ合いません。原因は何でしょうか？最近ユニオンのメンバーと話し合う中ではつきりしたのは、「非非常勤は不安定であまりまえ」という前提が大学にある、ということ。いえ、実は私

の中にもそうした感覚はありますし、友人や知人と話しているとき、この前提が根強いと感じます。これまでの「日本の常識」を引

きずっているのだと感じます。

安定して生きたいなら、非常勤ではなく正規を目指せ、登用試験の狭き門を突破しろ。それはそれで選択肢には違いない

ありません。しかし、かなり高いハードルです。もし私が登用試験に通ったとしても、京大非常勤全体の割合からすると例外中の例外。塩田理事

のアドバイスには、「試験に通る能力がない人間は使い捨てられても仕方ない」というメッセージが、裏表の関係でもれなくついてくるのです。

これだけ非正規雇用の割合が増えている時代(全体の3分の1、女性は過半数という最近の政府統計)、また有期雇用も増加の中、「非正規は不安定であまりまえ」を受け入

れている、生き辛い社会がどんどん加速していくでしょう。ヨーロッパでは、非正規は不安定な分、待遇面での優遇や公的な保護もいろいろあると聞きまして。非正規であることを安心して生きていくことを求め、主張していいのだ・・・これは新鮮な発見です。そして自分の中でほっとする感覚が生まれます。これからは非正規で働く私たち自身の意識の変化が、新しい社会への橋渡しになるのではないのでしょうか。

この日の団交は平行線をたどり、とても歯がゆい思いが残りました。終わってくびくびカフエに戻り、とにかくお疲れ様！皆で乾杯です。なんだけか「家」に帰った気分。私は「預言者」という詩集(カリール・ジブラン 1923年著)の一節を思い出していました。

あなたがたの家は、錨となるな、マストとなれ。傷を覆い隠すための派手な被いとならず、目を護るための瞼となれ。(佐久間 彪訳)

この詩の表現を借りれば、ユニオンのシンボル・くびくびカフエは、風をはらんだマストかもしれない。被いで固められた家ではなく、いつも風が吹きぬけている家。それは非正規という不安定を抱えながら、何か新しい価値観や居場所を作り出しているような気がします。